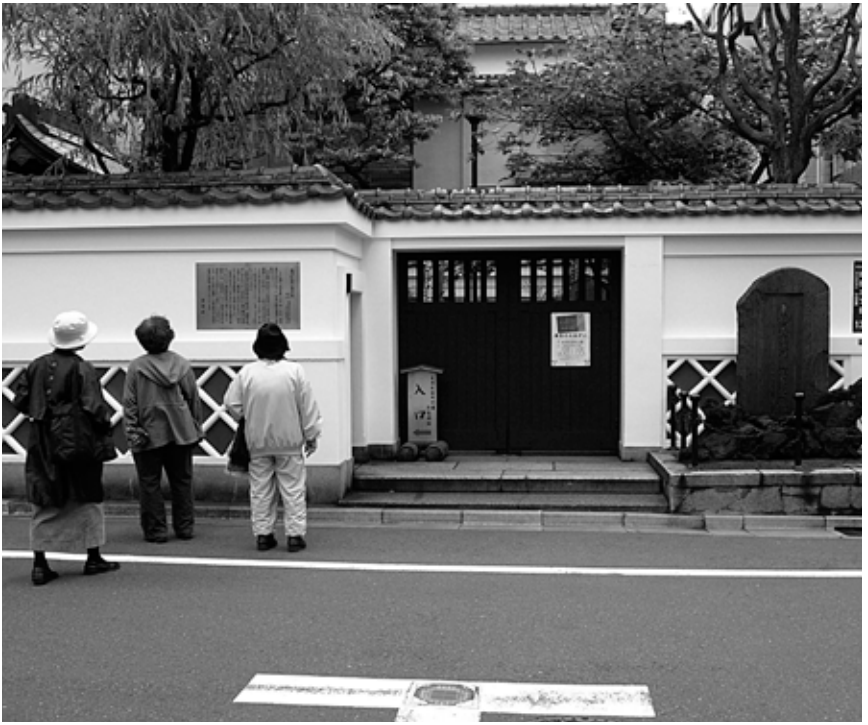
あさ 5

2010



本所松坂町公園

養之如春　　保多孝三著『柞廬印存』(四) より

養之如春は 中国・後漢の歴史家、班固が「漢書（中国二十四史のニ)」の「叙伝第七十上」に記した言葉で、「涵之如海　養之如春」。「之（これ）を涵す（ひたす）こと海のごとし、之を養うこと春のごとくす」。「心」が赴くことを「之」という。井上靖もよくこの言葉を色紙に書いたさうだ。

　他人とこのやうに接するのは勿論だが、自己に対するにもこのやうにしても良いのではとこの頃思ふ。作品は磊落な線でかるがると刻されてゐるやうにみえる

あさ

五　　月

紅　梅

紅梅にとどくかんばせ雲となり
梅園にあり春泥を跨ぎたる
黒雲といふ名の梅の紅の色
紅梅のリンリンといふ數の頃
福壽草花の限りに日を彈く

本町三　佐藤喜孝

雨含みぼてりと撓む桜かな
春の風魂だけで歩きをり
身二ツとなるを待ちをり紙風船
逃げ水や自分で孫を産んだとか
穀雨の日母の唱歌の脳よぎる

京橋　篠田純子

春日中鳩を翔たせて救急車
人と来て道を憶えず鳥曇
荒梅雨や思ひ切りよく物捨てる
旅はもう無理かと思ふ端居して
軒燈に眼荒ぶる恋の猫

千駄木　芝　尚子

坂の道いぬふぐり咲き金平糖
春一番自転車あまた薙ぎ倒し
気がつけば庭柚の芽のあさみどり
啓蟄や閼伽桶ならぶ井戸の端
一人ごと聞かれてをりし春炬燵

宝仙寺前　芝宮須磨子

一　燈

定梶じよう（つるぎちひたしで 剱地東出）

軒深きところ鍛冶やが菜を干せり
なにもかも凍てて一燈溝照らす
菜に塩をたっぷりとふり山眠る
面談す深きに懐炉ありてかな
わが軒の氷柱大いなるを誇る

角田山（新潟）

須賀敏子（所沢）

佐保姫の降りたるところ角田山
春岬佐渡へ対って山下る
雪割草樹下を明るく咲きにけり
地に伏して片栗の花写す時
群れ咲くや堅香子の中白一輪

蝌蚪生まる盛り上がりたる池の面
故郷の末黒野いつも胸の中
野に山に春の訪れピアニシモ
落葉踏む若き日の音戻らねど
手づくりの草餅の香いまひとつ

本町三丁目　鈴木多枝子

本門寺行

あぢはひの深き石段梅二月
本院の甍と春の空の色
入寂の居室より見ゆ枝垂梅
名刹の境内に出し甘酒屋
西馬込街道すぢの種物屋

浦和　竹内弘子

三　月

鍼力屋の向ひ豆腐屋春一番

芽吹き待つ木の間縫ひきて紅椿

三月や天金の書を失ひし

いもうとの遍路終へしといふ便り

しらすぼし平らに乾され海青し

田端　田中藤穂

春うらら幼児呼び合ふフルネーム

塀に添ふこの木あの木の木の芽風

ゆふぐれの坂を登りて辛夷かな

吊釜の揺れ三月の揺れしかな

春の雪猿の顔にはおでこなし

三光坂　東亜未

陽光

富田　長崎桂子

靴直す窓にあたらし雪解山
ペダル踏む東風に向へば潮の香
春田打ちエンジンの音日暮まで
雨上り花粉の畫に涙して
雲動く三月の風つむじ風

大宮　早崎泰江

百合の樹の莟ふくらむ博物館
見に行かんミモザ咲けりと知らされて
外国語とび交ふ電車春うらら
花芽見ゆ母の遺せし牡丹に
春寒しぐんぐんのびる電波塔

水平に

水平に終了証書山笑ふ

長寿眉と言はれその気に万愚節

ちる桜手を結ぶ子と結ばぬ子

さまよひて著莪の白さになってゆく

歩みきてその他大勢春の水

河田町　堀内一郎

花三分なぜか華やぐ心地せる

昼の席春の障子をあけ放つ

哲学の道初花の二三輪

花みづき明るく咲いて散り急ぐ

ママレード煮る香広がり春を呼ぶ

中井　森山のりこ

見えぬ雨閑かな刻の美顔術
知らせ待つけふいちじつの重き春
太過ぎの関節関門角隠し
ひらき初むひとへ桜に清む嫁御
江戸彼岸歩くヨーヨー大道芸

落合　森　理和

雪椿双蛾に似たる仮名手本
夕梵の聞こゆ双株春の風
紅梅のうすく濃くある色ふしぎ
天牛に仮名をふるかと猫に問ふ
深深と新樹の闇に入りたまふ

鍋屋横丁　吉弘恭子

淡路島

ぷるぷると紅震はせつ雉子の飛ぶ
厳めしき橋桁に添ふ春の潮
蘖や人形浄瑠璃鄙びをり
離宮梅純白包むうすみどり
桜鯛淡路流なる厚作り

清瀬　赤座典子

三月の喜寿迎へたる髭の夫
啓蟄の蟇待つ庭の風すこし
デコポンの枝折る重さ春の味
桜餅葉ごといただく我が家かな
満開の連翹の花ひよ競ふ

聖蹟桜ケ丘　安部里子

キャラメルの箱に天使やつくづくし
嵌め殺し窓に真っ赤な椿落つ
引鶴や我が恋仇の訃報聞く
池の魚鴎が銜へ春浅し
卒業や徴兵検査のなき国で

曳舟　遠藤　実

桃の花密に開きて力あり
花待ちの若木ほのかに紅をさし
夜の桜残像のごと空おほふ
浮世絵の桜現世に咲きつづく
夜桜の闇に出会ひて一揖す

逗子　鎌倉喜久恵

ほつほつとほころぶさまを梅の花
白皙の雛の面冴返る
なごり雪巣ごもりの日はミルクティ
オフエリヤ尼にはならず花筏
葬送の花の盛りでありしかな

川崎・小田栄　木村茂登子

待ち侘びて待ち侘びて梅満開に
抗ひつつ老を馴らすや春の風
壁のギター爪弾いてみる春の風
明け渡す部屋片付かず春の風
春入日道をふさいで落ちにけり

白金　斉藤裕子

天皇陛下万歳と言ふ桜かな

白をもて会津に入らん夏帽子

天井の分だけ畳明易し

木に登るから秋風が見えてくる

あるいても歩いても冬筑波山

帽子被れば十年若し初鏡

墓を出て紋白蝶になってゐる

裏おもてないセーターで歩きだす

朝夕の水を掴みて母の夏

あいさつは翅閉じひらき秋の蝶

堀内一郎

疎開地、福島県矢吹町で終戦を迎えた。それまでは俳句には、全く無縁で趣味と言えばハーモニカを吹く程度で、それでもダンボール箱に一つ楽譜を集めたものだ。

終戦によって、この町でも若い者たちが何か運動を起こそうと、近隣へ呼びかけが始まったのである。歌、ダンス、野球など偶々その中に俳句グループがあって私はそれに参加した。

一と月に数回集まったと思う。第一回は裏庭で焚火をして、それを題に作ったものだ。

どんなのを作ったか忘れてしまった。まだ本格的にやるつもりは全く無かったがドブ焼酎を口に親交を深めて行った。或る日、仲間の一人が町医者で俳人が居るから教えて貰おうと言うことで、一夜焼酎を抱えて医院へ皆で押しかけた。行くと既に、お酒の支度ができて居て飲みながら俳句入門となったわけ。前にも何処かで触れたが、この先生が「濱」同人野木杏青先生で「飲まなければ教えないぞ」の一言が耳に残っている。お酒が俳句の縁になろうとは。

鵲村字鮒江の春の水

ポタポタと樹液降るなり鳥曇

葉桜や男の料理出来上る

天上に五衰の天女桐の花

如月や語尾のやさしき人とゐる

松落葉踏みて舞妓の木履は

薄紙につつむ御室の落花かな

朧夜の一枚あけてある雨戸

蕎麦食べて祭の町を後にせり

夫居るは夢にてありし春炬燵

田中藤穂

俳句を始めた頃、御夫妻で俳句を嗜んでをられる友人が居て、よい俳人の句集を次から次と貸して下さったのは有難かった。正岡子規の俳句革新以来、多くの男女俳人が、沢山の名句を残されたことに目を瞠る思いだった。

俳句は言葉や字も難しいし、勉強していないと意味のとれないものもあり、始めは取付きにくかったが、無用なところは捨てて心髄だけを残してゆくという作業が面白くなり、はたまた歳時記の中の言葉の豊富さに魅せられて、何時の間にかのめりこんでいた。自分の最初からのノートを見ると、よくもまあ、こんなに沢山作ったものだと驚くのですが、その句を詠んだ時の状況から気持まで、ありありと思い出せるのは不思議です。俳句の中で幻想の世界を自由に遊べるのも魅力です。

今は句会で皆様にお逢いしてお話しするのが、私の何よりの頭と心の活性化の源になっていて、余生を楽しく送らせて戴いております。

一人一句

雪の富士マグマが透けて見えてゐる　佐藤喜孝

如月や郵便受に年金便　斉藤裕子

箸づかひ下手なるままに蕨餅　篠田純子

もうそこにきのふはなくて福寿草　芝　尚子

夫の忌のその日のやうに雪ふれり　芝宮須磨子

植木鉢伏せて穴あり日脚伸ぶ　定梶じょう

辛淑玉や樹々には重し春の雪　須賀敏子

留守電に話す空しさ外は雪　鈴木多枝子

聖餐のごと一椀の風邪の粥　竹内弘子

涅槃図へをぐらき堂の奥曲る　田中藤穂

早朝の湯気と豆腐と春の雪　東　亜未

前月作品

白と青太く鮮か葱を焼く　長崎桂子

春の雪しばし墨絵の世界なり　早崎泰江

秋山郷何処かに潜む雪女　森山のりこ

春の雪なにかしらある冷蔵庫　森　理和

手袋のときどき行方知れずなる　吉成美代子

恋猫に指鉄砲をむけてみる　吉弘恭子

大地震の画面に変り二月尽　赤座典子

初雪や雪かきに燃ゆ夫のゐる　安部里子

ヒマラヤン恋猫となり生臭し　遠藤　実

強東風を迎へ打つ気で外出す　鎌倉喜久恵

春の川たゆたうてゐる曲り角　木村茂登子

喜孝抄

四月作品より

吉弘恭子

唐突に人裏返る春の草　　佐藤喜孝

子供が小さかった頃公園に連れて行くと、芝生に手足をついて動物歩きをして喜んでいたことを思い出す。もちろん裸足。この句を読んで三〇余年前のことがふと甦った。草があると寝転びたくなってしまうのは私だけだろうか。冬をこして暖かくなったひと日寒さから閉じこめられていた開放感から天を仰ぎたくなった。空を見上げてみると、ほのかな草の香りが鼻孔をくすぐった。この句の眼目「裏返る」が面白い。腹這いからうわむきなのか、その反対なのか。どちらでもいい問題であるが、裏表を考えてしまった。柔らかい大脳を育てたいと思っている。

もうそこにきのふはなくて福寿草　　芝尚子

物は、昨日側にあったものは故意に捨てたりしなければ何時までも身の回りにある。何時もある物が見あたらないといらいらしたりもすることがある。この句は物ではなく昨日という時間である。

時間は生きているものに関係なく規則的に過ぎ去って行ってしまう。過ぎ去ることによって又新しいものが生まれてくる。

「もうそこにきのふはなくて」というフレーズは、いろいろ詠み手によって思うことがバラバラになるかも知れない。季語の福寿草によって作者の心意気が生き生き感じられた。後ろを振り返っても致し方がないのだ。前向きな姿勢をと、読者に語りかけている。わかりやすい言葉で成り立っているが、心に沁みた句になった。

夫の忌のその日のやうに雪ふれり　　芝宮須磨子

ご主人の亡くなられた日の雪はどんな雪だったのであろうか。東京で住んでおられたので、雪国のようにどっかと降ったのではないだろうと想像した。新潟から東京に引っ越してきたとき驚いてしまった。冬に青空があるということに。11月頃から3月までは、雪

が降らなくてもいつもどんよりとした雲がかかっていた。今日の雪もあの日のように、閑かにしずかに降っている。と作者は雪降りを楽しんでおられたのかもしれない。状況によって雪もまんざらわるくはないのだ。

植木鉢伏せて穴あり日脚伸ぶ　　定梶じょう

穴の俳句はいろいろあるが、植木鉢の底の穴の俳句は初めて詠んだ。草木が植えてあれば穴など気が付かない。植え替えのときに新しい土を入れ直すのに初めてみるものだ。日脚伸という季語の使い方で、そろそろ新しい草木の準備をと思いたち、植木鉢をきれいに洗って乾かすときに改めて穴の存在を確認した。季語によって、上五中七の何でもない言の葉が生き生きとしてくることがこの句を詠んで再確認した。

留守電に話す空しさ外は雪　　鈴木多枝子

面と向かって話をすることには、余り抵抗はないのだが、久しぶりに声が聞きたくなって無駄話などと思って電話をかける。呼んでいる音の鳴っているうちは心が何となくどきどきしてしまうのは私だけであろうか。もう電話口にと思っていると留守電の案内が機械的にしらせてくる。機械に弱いのでどぎどぎして、うまく話せない。最近留守の時は電話を切って又かけるようにしている。つっけんどんな話しぶりを聞かせるのならば、又改めてかけた方がと思っている。

「外は雪」の季語は空しさに対して何となく柔らかく聞こえてきていい句になった。

春の雪なにかしらある冷蔵庫　　森　理和

中学生の頃我が家には冷蔵庫がなかった。食事のおかずは好き嫌いに関係なく全部食べ終わらなくてはいけない。それにつけても現代はなんて少し大げさに言うとなんと便利なものだ。冷凍したり、氷を作ったりとあの頃は思いもよらなかった。ストックが出来るので野菜などは少し多く買っておける。余った肉も賞味期限が書いてあるのでこれ又置いておける。

何かしらあるという言葉は現代における便利さを表現するのに的確なものである。

春の雪が又いい、凍えるような冬の寒さと違ったあたたか味が感じられた。何時も言えることだが季語の大事さが、いい句にも普通の句にもなったりする。

奈良の春

鉛色の黄砂の中を新幹線
花冷や飛鳥大仏首かたげ
夫と行く菜の花の道明日香村

篠田純子

石舞台中から見上げ風光る

笹鳴や石さまざまに明日香村

明日香村寺の際まで春の畑

風鐸と吠えあってゐる春疾風

春光に裳階のリズム塔笑ふ

足萎ゆる春の明日香に遊び果て

貝の粉蹴鞠に塗りて春白し

あをかき集

竹内弘子選

ひと言に温もるこころ春の雪
生きてゐるしるし春灯玄関に
春霙止み淋しさのどっとくる
春雨やこまごまとする厨事
かの日来し戦勝祈願梅の磴
石段のすりへってをり梅の寺

田中　藤穂

春の海金箔をのべ日輪落つ
いま散るとばかり風の姫こぶし
春雷に一瞬猫の歩の止まる
風鐸のカラリと鳴って春嵐
仰向きの椿流して春の川
花大根垣乗り越えてやって来る
らーめんの旗にことさら春一番
有り得ぬと思ひし傘寿雛まつる
卒業期処世の術と留年す
ほしいまま寝過してさへ春愁
覚めやらぬ夢見心地に春の雪
舞ひ舞ひつ土にとどかぬ春の雪
はこべらや埋立てられて海遠し
花水木歩行者天国オープンカフェ
春泥の道殘りゐて常夜燈
遠回りしても春泥続きをり
暖かや相槌ばかり同い年
日溜りに夢を見てゐる金盞花

鎌倉喜久恵

木村茂登子

長崎　桂子

逃げ水や系図に伏せ字ひと所　篠田　純子
花冷やひとり消えても気づかない
田に畑にビニールハウスに黄砂降る
脳内に音楽涌きゐて春が来た
やはらかに枝垂桜の縺れ解く
藁塚の数霜つよき日のつづきけり　定梶じょう
糞落とす木曳く馬なり雪に立つ
鬱然と積まるる貯木春を待ち
春来り港の町の種物屋
番台に飾って紙の雛かな
本門寺巡りて憩ふ枝垂梅　吉成美代子
山門の甍まぶしく昼の月
錦鯉光あふれて春の池
寒梅の開かんとして今日もあり
自転車で風切って行く春うらら
あいまいに教へられたる春の道　芝　尚子
ふらここの子や青空に身を放つ
沈丁の匂ひの雨のひもすがら

目で追ひし風の流れやシャボン玉
花粉症と気づかぬままに水っ洟
啓蟄や径一寸の庭の孔　赤座　典子
水温み家々廻る研ぎ屋かな
車内吊りの入試問題解けぬまま
春浅しぱりぱりぱりと新聞紙
枝垂梅「顔面注意」の札下げて
板塀を越え白梅の枝垂をり　須賀　敏子
ふんはりと落ちて上向く椿あり
水菜にも黄色く花の咲きにけり
マンションのベランダ自在恋の猫
騙し絵やあの一言で桜散る　遠藤　実
春光のとどかぬ地下の花の店
飲み残す湯呑が二つ春炬燵
春宵のひと言足らぬ訣れかな
春浅しいちゃうの握り拳かな　東　亜　未
春の雨吸ひ上げる樹に耳当てる
花三分大樹の瘤の物語

久に会ふ友と味はふ黒眼張　森山のりこ

吊雛を掻き分け入る珈琲館

菜の花の青冴え冴えと白酢和　佐藤　喜孝

大欅もやもやもやとしてきたる

すこしづつ重なる梅の五辨かな

三月の傘をひらきて明るうす

かぎろひて木々の透き間に入り込む　吉弘　恭子

春の空光りのなかの飛行船

春昼や乳房の上にもみぢの手

春の雲水に映れり川鵜とぶ　早崎　泰江

囀りに耳鳴りしばし遠のけり

受験子の電話騒動しづまれり

太閤の花見を凌ぐ祝酒　森　理和

青鷺の辛夷散らして我が庭へ

青鷺の発ちて動かぬ春の池

暖かや出迎へられる夜の駅

爪弾きてギターの音色卒業歌　芝宮須磨子

爪を切り母を思ひし春の夜

繼

生きてゐるしるし春灯玄関に　藤　穂

灯りが点いていないと、留守を広告しているようで、無人の時でも「玄関」の灯りは点けておくのだそうです。

石段のすりへってをり梅の寺　〃

二月の下旬、池上本門寺へ吟行しました。

日蓮終焉の宅を、池上宗仲が寺として、一三一七年に開山したそうです。　向田邦子の脚本で久世光彦が演出したテレビドラマに、この辺りの町並がよく出てきました。いいドラマが作られていた時代で

す。

お寺にこのような「石段」がありました。「すりへって」という俗語が上品にまとまっていると思いました。

花大根垣乗りこえてやって来る　　喜久恵

種子が飛ぶらしく、一箇所に咲いたものがあちこちとんで、しまいに垣を乗り越えてきたというのです。「やって来る」なんて、面白いと思いました。

有り得ぬと思ひし傘寿雛まつる　　茂登子

喜寿を文字通り喜んで祝ったのが、ついこの間のように思えるのに「傘寿」になるとは。「有り得ぬ」とオーバーに言っています。細ごました「雛まつり」の飾付をしている足腰の達者なお方のイメージです。

花冷やひとり消えても気づかない　　純　子

天候不順で桜の咲いている期間が長かったので、始終「花冷」のようでした。花見の混雑で見失ったのでしょうか、一種の怖さのようなものを感じました。老来とみに鈍くなった己に対する怖さを！。

田に畑にビニールハウスに黄砂降る　　〃

春になると、中国やモンゴルの強風による砂塵が、偏西風に乗って日本に飛んで来る。

九州などでは所によって洗濯物を外干しできないそうです。気象用語のほか、「霾天（ばいてん）」など、出典も定かでないような文字も面白い。

藁塚の数霜つよき日のつづきけり　　じょう

以前、道をはさんで田圃や畑のある所に住んだことがあるので、懐かしい景色です。埼玉もそうですが、東北、中部地方も、刈った稲を円錐形に積んだものを「藁塚（にお）」と言うようです。

ふんはりと落ちて上向く椿あり　　敏　子

肉厚の照葉のまにまに咲く椿は、花弁を散らし乍ら落ちるのでなく、付根のこんもりとした萼といっしょにポトリと落ちる。鮮紅の花だと。椿の木の下が赤く染まって見える。萼が重たいので、川なぞに落ちるとすぐ上を向いて、背泳のように流れて行きます。

水菜にも黄色く花の咲きにけり　　〃

栽培しやすいのか、店頭に多く並ぶようになった葉物野菜。サラダや鍋物に株のまま置いておいたら、黄色い花が咲き出したのでしょうか。このところの天候不順で野菜の高騰が続いています。

春浅しいちやうの握り拳かな　　東亜未

鎌倉幕府の第三代将軍源実朝が、鶴岡八幡宮で甥の公卿によって大銀杏傍で暗殺されました。折から源実朝忌、旧暦一月二十七日。

吊雛を掻き分け入る珈琲館　　のりこ

「珈琲館」の入口に、暖簾のように下げてある「吊雛」。仄暗い店内に対して、赤黄、金銀がひときわ映えて、綺麗でしょうね。

大欅もやもやもやとしてきたる　　喜　孝

細かに枝分かれして伸びる「欅」は、この季節。芽吹くほどに枝と枝の間が、「もやもや」と見えるのでしょう。

かぎろひて木々の透き間にはいり込む　恭　子

この身は容（かたち）とてない「かげろふ」、林に分け入り木々の間を入ったり出たり、変幻自在の境地に遊んでいるかのようです。助詞の「て」で上下を結ぶとそんな感じに受取れました。

藤野寿子さんを悼む

田中　藤穂

藤野寿子さんの最後の外出となった一月十二日の傳句会の日、寿子さんは、いつもの通りJR田端駅のホームのベンチに腰かけて私を待っていてくださった。

ご主人様の一周忌をすませて、やっと自由に動けるようになったとのことでしたので、傳句会へお誘ひし、寿子さんも大喜びで、傳と調の句会へいらっしゃるようになった。もともと暖流の谷中句会からのお付合なのだけれど、私も主人の介護で外へ出られない時期があり、久しぶりにお逢いした時は、お互いに少し老人になっていて足ものろくなり、年月を感じたものだった。でも寿子さんはいつも前向きの方で、米寿までも白寿までも生きたいと言われていた。生れ育ちは浜名湖畔の蜜柑山だと。ご主人は家具を作るお仕事で、職人も何人か置いて、四人のお子さんの二人はお医者様、ご夫妻力を合わせての御立派な一生だったと思います。

あの日も寿子さんは、リュックサックに蜜柑を背負ってきて、傳句会のみんなに配ってくださいました。実家の弟さんが、生協へ出荷した残りを送ってくれるのだとか、新鮮でいいお味の蜜柑でした。

あの日は雨降りで、傳句会では句会のあと新年会へ移動したのですが、一月のことで、もう

暗くなって、寿子さんは、目が悪いから夜は外出するなと云われているからとのことで、私もちょっと都合があって、新年会は失礼し、二人で落合の駅へ歩きました。その時寿子さんは「足元がこわいからちょっとつかまらせて」とおっしゃって、私の右腕をぎゅうっと掴んで歩きました。往きは田端までバスで来ましたけれど、雨降りだから地下鉄で帰るとのことで、大手町で乗り換えるとおっしゃって、私は高田馬場で降り、そのさよならが一生のさよならになるとは……。

翌日の午前に胸と背中に烈しい痛みを覚えて、救急車で日本医大に運ばれ、すぐ手術を受けましたが、そのまま回復されることなく四十三日後に亡くなられました。

何事にも一生懸命で骨身を惜しまなかった寿子さん、谷中時代からの思い出を辿ると、沢山ありすぎてとても書き切れません。もっともっとこれからも俳句を作ったり、お話ししたかったのに、私は今、大きな喪失感に打ちのめされています。でも、気をとりなおして、寿子さんの御冥福を祈り、これまで与えていただいた沢山のものに感謝しなければいけないと、自分を励ましております。

寿子さんありがとうございました。

どうぞ安らかにお眠りください。

三月十四日

追　悼　句

雨がふるまつすぐに降るしら梅に　佐藤喜孝

束の間の和やかな時ふきのたう　赤座典子

大凧の糸切れ光残りけり　宇都宮敦子

耳許にふくよかなこゑ花馬酔木　斧田綾子

今の虹空にかざせる十指組む　鎌倉喜久恵

あどけない童女の笑まひ藤の花　斉藤裕子

貴女は空から一緒に桜見ませうね　篠田純子

梅白し昭和のかをり寿子さん　須賀敏子

引く鴨にいよよ幼しかいつぶり　竹内弘子

花あんず永別をまだ諾へず　田中藤穂

初句会われ天とせり「はい寿子」　森　理和

熟し蜜柑おいて金星遠のけり　吉弘恭子

藤野寿子作品抄

十二月ロボット力士はっけよい

羽子板市売手は茶髪の黒絆天

羽子板市ヨーイ手締めの声高し

迷ふのみ悟りもならず残り柿

小春空仰ぎ見神田川のぞき

防空壕召されしまま兄そぞろ寒

寒拆や睦町会にぎりめし

炊飯器停電勤労感謝の日

青みかん手つかずあの日見合の日

紅葉坂お達者クラブ口達者

敬老日国歌斉唱すらすらと

あるけあるけ肥満肥満敬老日

硯洗ふ面相小筆ねむごろに

仮の世をどんぐりころころいとこ会

仮の世をせっせっせっせと生身魂

シルバーよ園児よソーラン運動会

分数ほめ朝顔日記手直しし

父の日や天下御免と黒鮪

父の日の海鼠どっしり考へ中

アオリイカ手拍子稽古盆をどり

勝つまでは日の丸弁当杉苗植う

アロハシャツ町会改革空まはり

会則をガラス張りにと扇子振る

新型風邪予防のちらし知事笑顔

藤野寿子さんの俳句

佐藤喜孝

仮の世をどんぐりころころいとこ会

この句は「東京四季出版」の『全国俳誌巻頭句一覧』の二千九年度版に掲載されてゐる。作句のきっかけは題詠の「仮」である。寿子俳句の特長のひとつに形容詞をほとんどつかわない。〝形容詞から文章は腐る〟といふ文を最近読んだ。俳句も勿論同類である。まさに本道をゆく表現法である。名詞と助詞などをつかひ小気味良いリズムでたたみかけてくる。調子がよいので軽い内容の句かと勘違いされるかも知れない。「いとこ会」のいとこは作者のいとこかも知れないが、もっと若い血縁者かもしれぬ。仮の世故に大切にして欲しい、「どんぐりころころ」は従兄弟たちへのエールであらう。

分数ほめ朝顔日記手直しし

父の日や天下御免と黒鮪

父の日の海鼠どっしり考へ中

寿子さんはこのやうに家族を大所高所から見つめてをられた。夏休の「朝顔日記」はいまでも続いているやうだ。お孫さんとの交流を楽しまれてをられた。

寿子さんの急変を知ったのは一月の愛宕山神社吟行会の時。来られるものと予定してゐましたが、残念なことになり驚きました。「父の日」の句もそんな吟行会での成果です。葛西水族館の黒鮪の存在感はそれはそれはすごいものでした。「天下御免」といひ「海鼠どっしり考へ中」といひ頼りになりさうな父親の風姿がおもしろおかしく愛情をもって表現されてゐます。

アロハシャツ町会改革空まはり

会則をガラス張りにと扇子振る

寿子さんの俳句を読んでゐると日常の行動が分る、といふのも寿子俳句の大きな特長。老人会や町内会の出来事を俳句にする。これは易しいことではない。むずかしいことを難なくこなす力を備えてをられる。季語の使ひ方に全く無理がない。大いに参考になる。掲句も町会の会議の様がありありと伝はる。俳句表現法を確立された作家である。

呼びかける餅搗き町内すぐ応ふ
保護欅落葉そのまま散りしまま

寿子さんとは『獐』のときから交流が始まる。書もよくなさり展覧会を拝見に行ったこともあった。掲出の四句は私のデータベースの一番古い作品。『獐』の一九九六年一月号発表句である。

吟行会の折に歩きながらいろいろ話をした。口数の少ない方で自ら話しかけてくることは少なかった。私を異性と思っていただけたのかも知れない。東京の何処を歩いてもはじめて来たと喜んでいただいた。句風から江戸っ子かと思っていたら実家は美味しい密柑をつくる農家であった。

青みかん手つかずあの日見合の日　寿　子
晴(ひとみ)しづかに秋晴の山　竹　洗

若き日の回想。青蜜柑が象徴的である。

俳句の豊穣な収穫を楽しみにしてゐましたのに誠に口惜しいことです。ご冥福を祈念いたします。

あを柳集

兼題　爪　　麟　選

「爪」といふ字形はよく見ると締まりのない不安定な形をしてゐる。もともとは手の指を下に向けつかむかたちとある。抓(つか)むの原字。これを爪の字に用いてゐることになるさうだ。「爪」は肩身の狭いことではある。人間の体の表面にある部位では一番硬い。女性の武器になるはずだ。

さて今回はどのやうな句が集まつたでせうか。

爪皮の朱色そろそろ菜種梅雨

爪皮は爪掛ともいふ。記憶の底にかすかに遺つてゐる。朱色の爪皮はをんなものであらう。朱色の爪皮と菜種梅雨の色彩が「そろそろ」といふやはらかい言葉にいざなはれ情緒豊かな作品世界になつてゐる。「つま」は「つめ」の古形、と「広辞苑」にあったが、他の辞書では古形とは確認できなかった。

春の夜の外せば妖し琴の爪

琴は私には小学校低学年の女先生の思ひ出につながる。演奏中はなんともおもはなかつたが、指から離れ畳かテーブルの上に置かれてゐることをおもふと「妖し」といふ感がするかも知れない。それも一つや二つではない。春の夜となればなほさらのこと。さういへば歯も頭髪も身体から離れた途端妖しくなる。

軒端から雨がこぼるる爪紅

爪紅は手足の爪に紅を塗るお化粧のこと。鳳仙花が原料でつまべには鳳仙花の異名。この句では鳳仙花と読ませる。沖縄民謡の「てぃんさぐの花」はこの花と知る。軒端からこぼるるほどの降りやうならば秋雨らしい。雨の降りやうも愉しめる。爪紅の花の色も一段と冴えて見える。明るい光景。

美容室に爪見本あり万愚節

いままでの句とは違いこの句はドライな作風。付け爪の見本であらう。芸能人のデコレーション派手派手の爪がテレビで大写しになるときがある。作者は一寸批判めいた感情で「万愚節」とした。付け爪はお洒落以外にも老人介護や医療の場、ホスピスケアなどでも用いられるさうだが、さういふものは美容室には置いてゐない。

爪切草海までつづく砂の道

爪切草は松葉ボタンと識る。何処か何時か見た風景。日照草と異名があるほど松葉ボタンは夏の日盛りを連想させる。題詠で知らない言葉に行き会ふのも楽しみの一つ。

空の色映れる鷹の爪を干す

鷹の爪は唐辛子の言換へだと思つてゐたが、品種名ださうだ。干し上がつた唐辛子の赤は見るだけで刺激的。そのつややかな赤い色に空の色が映るといふ。本当だらうか。云はれるとそのやうなこともありさうな気がしてくるが……。唐辛子と青空の色を見事に表してゐる。

五月末日〆切　句数自由

「囲」（圍）

六月末日〆切　句数自由

「国」（國　囮）

爪皮の足駄に蛇の目春の雨　東亜未

冴え返るバロメーターの爪の色　長崎桂子

春色の爪愛想よく梳る

爪皮の朱色そろそろ菜種梅雨

涅槃絵図庭木を登る爪の跡　森　理和

店先の南瓜に爪痕付けてみる

花アカシア猫が爪磨ぐ春地蔵　鈴木多枝子

鶏の蹴爪に追はれ裸足かな

雪降れり蹄の音の柔らかき

大鷹の獲物捉える爪痛し

爪紅の茶箱で雛のおもてなし

琴の爪走れば生るる「春の海」　木村茂登子

春の夜の外せば妖し琴の爪
爪跡が襖にのこる春の雨
爪痕のこんもりのこる猫の恋
読み止しの爪折りて立つ七日粥
軒端から雨がこぼるる爪紅
数珠玉を爪繰る嬰のゑみしほほ
爪立ちて母を見送る春の闇
橋爪にふと立ちどまる雪女
尋常にゆかぬ植田や夜爪切る
腹這ひて五臓に満たす爪草の香
下駄箱に母の爪皮入り彼岸
美容室に爪見本あり万愚節
桜南風爪切る背中まるめをり

吉弘恭子

田中藤穂

爪切草海までつづく砂の道

柚子にほひ浴後の爪のやはらかし

目を瞑り数珠を爪繰り春寒し

爪切と蕣のたね小抽斗

爪を切ることのさみしさ春の暮

二の丸へつま先上がり蕗のたう

春の燈を点す爪切置いてあり

触ルナといふ名爪紅種はぜて

空の色映れる鷹の爪を干す

枯枝に鴉の爪の餘りをり

春燈小豆のやうに爪を塗り

空蟬の爪の力に春の風

爪紅は立膝強ひる釣忍

竹内弘子

定梶じょう

佐藤喜孝

三月の句会

傳　中野区　カフェ傳

春燈や小豆のやうに爪を塗り　喜孝
かろき嘘まじえて見舞ふ春の雪　実
三月十日天金の書を失ひし　藤穂
人と来れば道を憶えず鳥曇　尚子
山羊の乳あをくさかりし花杏　弘子
今日の葉の艶を買ひけり椿餅　敦子
永き日や石の腰掛石の卓　綾子
春浅し仏のみ手に薬壺　純子
すかすかの目刺の頭又焦がす　典子
抗ひつつ老を馴らすや春の風　裕子
爪長といはれて春野かけまはる　恭子
二枚目も今は老け役春の雨　寒林
見えぬ雨長閑な刻の滴かな　理和
春寒しビデオテープの過去捨てる　敏子
闇の中白く浮き立つ春の蘭　美代子

調（つきのみや）　森林公園吟行

くれなゐの冷たき椿拾ひけり　綾子
ふところに人来て春の山動く　敦子
手作りの酢味噌と分葱うまかりき　藤穂
春の雲水に映れり川鵜とぶ　泰江
チョットコイとは小うるさき春の鳥　弘子
薄氷のそよ風よりもやはらかし　敦子
快復期らしきメールの着く余寒　弘子

七座（ほくと）句会　中野区・小川苑

さんぐわつのこぼれやすきは雪花菜かな　木枯
池の面盛り上がるかに蝌蚪生まる　多枝子
平椀に春の野菜をもてなさる　藤穂
春の景古ぶよ双眼鏡の中　喜孝
塀に添ふこの木あの木の木の芽風　東亜未
雪椿双蛾に似たる仮名手本　恭子
坂の道いぬふぐり咲き金平糖　須磨子
踏青の果ての貝塚踏みし音　綾子
荒梅雨や思ひ切りよく物捨てる　尚子
彼岸まいりいつも静かに待つ景色　房代
届かぬ報待てど待てども春重し　理和

連句勉強会　毎月第2日曜
希望者は左記まで（090-9828-4244）

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
（03-3368-4263）

調句会　毎月第3金曜
岸町公民館　竹内弘子
（0488-86-3501）

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
（090-9839-3943）

あとがき

今号は「近世俳諧と漢詩文」を誌面の都合で休載しました。

今月号の表紙は昨年五月両国吟行の折、吉良邸跡が公園になっているところのスナップ。私は人にカメラを向けるのが苦手で遠くからとかうしろからとかが多い。結果失礼なことになる。このときの吟行は盛りだくさん、下町は歴史の上にある町であった。

『あを』の投句欄は小さい俳誌の割に多い。作品欄五句、あをかき集七句、あを柳集を仮に五句とすると十七句、これに特作となると五十ほど作らなければならない。特作を別にしても二十余句を作らなければといふ気になる。このくらいの句数を作らうと意識し実行すると一年後には知らず知らずのうちに足腰が鍛へられる。そんな願いを籠めて私も多作多捨を心掛けてゐる。

六月吟行案内

場所　新宿伊勢丹屋上公園（現地集合）
集合日時　六月二十六日（土）十一時

前回中止になった計画です。
参加希望者は六月二十五日までご連絡ください

幹事・佐藤喜孝

二〇一〇年五月号
発行日　五月十日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090-9828-4244　佐藤喜孝
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。